

## グループトーク「私たちは原子力とどう付き合うか」

B班：7人（視察メンバーである清宮氏を含む）

清宮：では、今度は逆順で行きましょうか。では、私から行かせていただきます。

付き合い方ということで、一時的なものであるのか、恒久的なものであるのか、ということをもまず意識しなければいけないなど。先ほどもお話がありましたけれども、交付金が入って、財政基盤をしっかり固めて、インフラを固めて、その後にまた別の産業を形作る、という作り方もあると思いますし。一方で、なかなかそれが地理的にも難しいということであれば、もう恒久的に、原発をどんどん増設して、廃炉にして、というのを続けていくのか。ここははっきりさせないと、付き合い方というのは難しいかなと思います。

それに関連して、私個人としては、核のごみの問題はどうしても避けて通れないと思います。そういう意味でも、恒久的にやっていく産業としてはどうなのかなと思っています。

もう1つは、「原子力」とどう付き合うかということですので、原子力産業と原発を分けて考える必要もあるかなと思います。産業ということでは、東海には研究機関がいろいろあります。いろいろな可能性があるので、原子力産業自体は、私は、リスクというものを考えたときに、原発とはまた別に付き合ってもいいのかなと思っています。原発との付き合い方に関しても、いろいろな付き合い方があります。どうしても廃炉になってくる炉もありますので、そこはしっかり廃炉という産業、これも雇用とお金を生むのではないかとされていますので、そこも真剣に住民の方々も知る必要があるのかなと思います。そういう柔軟な付き合い方があってもいいのかなと思っています。

はい、どうぞ。

—— 原子力というのはまだ100年の歴史しかない。原子力というのは現代科学の本当の基礎になっているので、やめるというわけにはいかない。

ところが、原子力工学は、これは原子力発電も含めて言っているのですが、未完です。それで工学ですので、自動車と同じように乗り換えることができる。やめることもできるということ。

それから、やはりこれからは社会科学的な視点を、原子力発電の応用については考えていくべきだ。というごく自然な話なのですけれども。

—— 私は1点だけ。知るということと話し合うということを書きました。いろいろな見方がある中で、ゆずれるもの、それからゆずれないものを多角的に知り合う。それから、なぜこの人はこういうふうにゆずれないと言っているのだろうか、ということの背景、その人の価値観などを併せて話し合う。そういうところから、近寄れるようなところとか、妥協点じゃないですけれども、納得性が高まるようなところが少しずつ見えてくるのかなと。最初

から、あの人は賛成だから、あの人は反対だから、と色を付けるのだけはやめたほうがいいかなと思っています。以上です。

—— 私は、原子力に対して白黒はっきりさせるというのは難しいのかなとは思っているので、今回、私は新たに知ることができた情報が結構たくさんあったのですけれども、そういうふうには、多くの人が情報を共有できるようにするべきなのかなと。J-POWERの方が全戸訪問をされているという話もありましたけれども、方法はいろいろあって、答えはないのかなとは思っているのですけれども、まず、多くの人が情報を共有していくところが大事なのかなと思いました。以上です。

—— これは「原子力発電」の話になってしまうのですけれども、たぶん付き合わないという選択肢はなくて、一時的とかいうのもあまり関係ないかなと思っています。個人的には、そこに原発がある自治体か、そうではないか、という区別だけかなと思います。そこに原子力発電所がなくても、例えば福島みたいな事故が起きれば、いろいろなところに飛んでいくので、立地自治体でなくても、たとえどんなに離れていても、避難計画は必要かもしれないというのがあるので、付き合うことをやめるという選択肢はなかなか難しいかなという気がしています。

それから、今、木村さんの話にもあったのですけれども、発電所や事業者、ないしは研究者が出すものは、安全です、安全じゃないという話がメインになってしまっている。逆に言えば、住民の方や自治体が、「どのくらいのリスクまでなら許容できるか」ということを示していかないと、事業者側も何を示したらいいのかが分からない。「これくらい安全です」と言っても、それが受容されるかどうか分からないものを示しても、何も意味がないので。例えば、「外に出たら棒に当たるかもしれないから家に引きこもる」と考える人はほとんどいないと思います。「隕石が当たっても無事な発電所を作れ」とか。現実的にどこまでなら大丈夫かということを詰めていく必要があるかなと思いました。

—— 私は、福島の事故をしっかりと受け止めて、これから何をしていけばいいかを考えていけないといけないと思います。あれはあれ、じゃないじゃないですか。どこで何が起こるかは分からない。ある意味人災的なところがあるので、そこをしっかりと考えていかなければいけないと思います。

もう 1 つは、原発のある地域の人とない地域の人考え方は全然違うので、いろいろな思いをお互いに聞けたらいいのではないかと。ものすごく難しいのですけれども、原発は現実にありますし、ごみも出ているわけだから、そこを考えていかないと。ある地域の人心理と、ない地域の人たちの心理を、お互いに話し合いができたらいかなと。そこから皆がいろいろ話し合っ、知恵を出して、じゃあどうすればいいのか。やっぱり脱原発がいいのか、何がいいのか、という話をお互いにしていけないと。実は私も超脱原発だったのだけど、

木村先生と付き合うようになって、いや、聞く耳を持たなければいけないと思ったのですね。感情論だけではいけないと思があるので。それを考えられたらいいなと思います。

—— 皆さんから出ている意見と一致しているのですけれども、具体論で行くと、おっしゃった核のごみですね。結局は「トイレなきマンション」の話で、国策として核燃料サイクルを作るといったのに、六ヶ所もいつまでも駄目、それからもんじゅもこけた。こういう状況だと、核燃料サイクルがいつまで経っても閉じない。いつか閉じるかもしれないけれども、いつのことか分からない。非常にリスクである。高レベル放射性廃棄物の処理、処分ができない。未だに原研の中にも 400 m<sup>3</sup>くらい貯まっている。それから、プラント自身が、絶対安全ではなかなかないですね。地球の構造を見ても、これだけプレートが動き回っている中で、火山と断層だらけのところでは安全な場所なんてないわけです。

それを解決するとしたら核変換。中性子を当てて、長半減期の高レベル廃棄物の毒性を軽減する。そういうことは技術的には可能なのですね。ただ、ものすごく金が要る。それは電力会社とか企業に任せるのではなく、国がやればいい。国が決めた原子力政策だから、国が責任を持って消滅処理というか、廃棄物の毒性を軽減する処理をして、地層処分の負荷を軽減する、というふうにやってもらいたいと思います。

先ほどおっしゃったように、社会科学的な観点を皆がもっと共有して、

—— そういう意味で、私はこの取り組みにも参加したのですよ。専門的なものは専門家を交えて、何でも聞いていいという立場で行うべきだと。

—— そうですね。専門家の方たちは専門家の方たちで、というのがあっても、それでは誰にも理解してもらえないから。

—— 専門家をやっつけるくらい質問すればいいのですよ。

—— それには勉強しないとイケないですけども（笑）。

清宮：最低限の知識は身につけないと質問できないですよ。

—— 原電の連中は下手だね。説明会やっているけれども、一方的に「安全だ、安全だ」「大丈夫だ、大丈夫だ」と言うばかりです。

—— 私が言いたいのは、原子力発電をやって 30 年、40 年ですよ。じゃあ、30 年、40 年かけてやめましようとかやめていけばいいのですよね。すぐにやめましよう、もうこれから

ストップしましょう、というのではなくて、40年かけて作った、じゃあ40年かけてやめましょう、というのがフェアなやり方ですよ。

—— 40年かけたら、40年分廃棄物が出てくるわけですよ。

—— 廃棄物も含めてね。

—— そちらの方向に持っていくのに、じゃあすぐ、というのは絶対にありえないわけだから、そちらの方向に向かって動いていく、っていうことですよ。

—— 人生と同じで、人生100年以上生きられるはずがないので、100年計画を人生については立てればいいわけ。

—— (笑) 途中でどうなるか分からないですけども。

—— 時間をかければいいです。プライオリティを決めて、この炉は30年もちませんね、といたら、それを削っていけばいい。

—— あとは、私は九州出身なので、原爆が近いのですよね。西日本だから。東日本の人たちとは温度差があるのですよ。核とか原子力というものに対する温度が違うので、そこも考えなければいけない。

木村：それでは、グループトークはここまでにしておきましょう。

グループトーク Bグループ (2/2)

「私たちは原子力とどう付き合うか」

白黒はつきりさせるのは難しい。多くの人が情報を共有していくべき。

知る、話し合う。ゆずれないものとゆずれないものを多角的に考える。背景を知る。

原子力は100年の歴史しかないが現代科学の基礎である。

一時的なものか、恒久的なもの。

原子力工学（原子力発電）はまだ未完である。

核のごみ。

社会科学の考察が原子力応用に必要だ。

原子力産業と原発（廃炉）。

たぶん付き合い合わない選択はない。立地自治体 or そうではないか。

福島事故をしっかりと受け止めて、何をしていたらいいのかを考えていく。

核燃サイクルの確立は極めて困難。  
・高レベル廃棄物  
・安全性

どの程度のリスクまでを許容できるか議論。

原発のある地域の人とそうでない人たちの考えを聞けたらいいのでは。とても難しいことだけど。

核変換による廃棄物の毒性軽減に注力すべき。国がやる。電力任せは無理。